

# 大学院奨励研究員研究報告書

2026年 3月 10日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏 名	奥中 淳未 印
-----	---------

指導教員

所属・職名	言語コミュニケーション 文化研究科・教授
氏 名	于 康 印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	名詞修飾型数量詞構文に関する研究
採用期間	2025年 4月 1日 ～ 2026年 3月 31日

研究科委員長・研究科長印	研究科受付印

提出先： 所属研究科事務

※所属研究科→研究推進社会連携機構（大学院）

**研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）**

**（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）**

雑誌論文	著者名	Atsumi Okunaka	論文題目	The Semantic Functions and Interpretive Mechanisms of Quantifiers in 'Attributive Quantifier' Constructions of the Form 'Counting Quantifier + no + Uncountable Noun' in Japanese		
	雑誌名	言語コミュニケーション文化		巻号	発行年月	掲載頁
				23	2026年2月	pp. 39-51

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

**（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）**

学会名	日本語誤用と日本語教育学会	開催地	中国上海 上海财经大学
題目	「計数詞+の+連続体名詞」は「属性Q」で捉えきれるか？ —多義的な数量詞の意味機能とその解釈のメカニズム—	発表年月日	2025年10月25日

## 研究経過状況（3000字程度）

### ● 博士学位申請論文の経過概要

博士学位申請論文の執筆にあたり、研究成果の学会発表および論文投稿を行った。

2025年10月に開催された日本語誤用と日本語教育学会主催の「2025年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム」において「『計数詞+の+連続体名詞』は『属性Q』で捉えされるか？—多義的な数量詞の意味機能とその解釈のメカニズム—」と題し、口頭発表を行い、その研究成果が認められ、大学院生フォーラム優秀発表賞を受賞している。

さらに、2026年2月に刊行された言語コミュニケーション文化学会の学会誌『言語コミュニケーション文化』に論文「The Semantic Functions and Interpretive Mechanisms of Quantifiers in 'Attributive Quantifier' Constructions of the Form 'Counting Quantifier + no + Uncountable Noun' in Japanese」を投稿し、査読審査を経て採用に至った。以上はすべて、博士学位申請論文の内容に直接関わる内容である。

そして、2025年9月29日付で博士学位申請論文「日本語における名詞修飾型数量詞構文に関する言語学的研究」を提出した。その後、2025年12月5日に開催された公開発表会及び口頭試問を経て、2026年1月28日に開催された所属研究科委員会にて博士学位の授与が承認された。

### ● 論文の構成

本論文は、次のように6章から構成されている。

第1章 問題提起と研究目的

第2章 先行研究と本論文の立場

第3章 名詞修飾型数量詞構文のタイプと数量詞の意味機能

第4章 多義的な数量詞構文の意味解釈のメカニズム

第5章 名詞修飾型数量詞構文における数量詞の捉え方と意味機能の再考

第6章 結論と今後の課題

### ● 論文の要約

本論文は「日本語における名詞修飾型数量詞構文に関する言語学的研究」と題し、日本語における名詞修飾型数量詞構文、すなわち「数量詞+の+名詞」という形式をもつ構文を研究対象とし、数量詞の意味機能を再整理したうえで、多義的な構文における数量詞の意味機能をどのように解釈すべきであるかという意味解釈のメカニズムを明らかにすることを目的とするものである。

以下、本論文の内容を、章立てに沿って説明する。

第1章では、研究の背景及び問題提起・研究目的を述べる。具体的には名詞修飾型数量詞構文にまつわる諸問題について述べ、研究の目的と意義について説明し、本論文の構成を述べたうえで、研究を行う上での術語やその定義などについて述べている。

第2章では、先行研究の問題点を指摘した上で、本論文の立場を述べ、数量詞構文の「数量詞」の範囲と「数量詞」の意味および、定義を述べた上で、本論文で対象とする「数量詞」の範囲と意味機能を明らかにするための立場を示している。名詞修飾型数量詞構文に関する先行研究を踏まえ、それらの問題点を踏まえて、本論文の位置づけとその立場を明らかにしている。

第3章では、名詞修飾型数量詞構文における数量詞の意味を再検討し、多義性を踏まえた意味機能を明らかにしている。具体的には、数量詞の意味解釈のメカニズムを明らかにするにあたり、先行研究においてその意味がどのように捉えられてきたかを整理し、そこに多義的な解釈の視点が十分に組み込まれていないという問題点を指摘したうえで、再検討の必要性を論じ、複数の数量詞が共起する用例を用いながら、多義的な視点を加えて数量詞の意味機能を明らかにしている。

第4章では、上で分類した数量詞の意味の表出を手掛かりに多義的な数量詞構文を対象に、用例を用い、意味解釈のメカニズムを明らかにすることを目的として、再分類した名詞修飾型数量詞構文のタイプ別に分け、それぞれの数量詞において文中でどのような意味解釈のメカニズムが働いているのかについて明らかにしている。

第5章では、第3章および第4章で明らかにした多義性を踏まえた意味機能と意味解釈のメカニズムを通して、名詞修飾型数量詞構文を通して数量詞の捉え方を明らかにするこ

とを目的として、各タイプに分けた名詞修飾型数量詞構文の異同からその共通性を探る方法を取っている。

第6章では、本論文の結論をまとめた上で、今後の展望について述べている。

以上を踏まえて、本論文では以下の点を明らかにした。

- ①数量詞構文に関する研究はかなりの蓄積があり、数量詞移動に関する研究はすでに深く掘り下げられており、名詞修飾型数量詞構文を扱う研究もその例外ではない。その一方で、文中に複数の数量詞が関与する構文に見られる数量詞の数量詞間の意味的制約とその多義性、さらには文脈に応じた数量詞の意味機能の変化に注目した研究は少なく、まだ解明の余地が残る。名詞修飾型数量詞構文において、対象構文と分析基準を統一した基準で分類し扱う必要性と、数量詞の意味機能を多義的な視点から捉える必要がある。
- ②数量詞の意味機能を「属性の限定」「真部分集合の範囲の限定」「種類の数の限定」の三種類に整理した。「真部分集合の範囲の限定」は「数の限定」「量の限定」「集合の限定」という三つの下位分類に分けられることを明らかにした。これらの機能は数量詞の共起や文脈により解釈が変化するが、明確な意味制約がない場合には複数の意味が同時に存在する多義的解釈になる。
- ③数量詞の意味機能は名詞の「分割可能性」「特定性」「分類可能性」の三要素によって解釈できる。分割可能性が低い場合には「属性の限定」に、分割可能性が高い場合には「真部分集合の範囲の限定」として解釈しやすい。文脈において分類可能性が示され、名詞の非均質性が顕在化する場合には、「種類の数の限定」として解釈される。特定性については、意味機能の解釈に関わるものの、その影響は文脈に依存する。具体的には分割可能性が低い場合には特定性が高い一方で、分割可能性が高い場合には特定性が必ずしも低いとは限らず、その意味機能の解釈は文脈に依存する。
- ④名詞修飾型数量詞構文全体を通して数量詞の意味機能とその解釈メカニズムを捉えようと、数量詞は常に名詞の一側面を限定するという点で共通する機能を担っている。「属性の限定」「集合の限定」「種類の限定」というように、それぞれ異なる対象の限定であるが、いずれも名詞句の意味解釈に関わるものを限定する機能として共通している。また、数量詞が名詞そのものの数量を限定する場合、その数量は、動詞修飾型構文とは異なり、一定のまとまりとして完結した「上限付きの数量」として捉えられる傾向がある。「上限付きの数量」は、名詞修飾型数量詞構文における数量詞の特徴を示すものである。

本論文は、扱う数量詞の対象を「数詞+助数詞」という形式でかつ、あるものの数量を表すものに限定し、多義性を踏まえ、その意味解釈のメカニズムの解明を試みた。数量詞が何らかの数量を表す場合における意味解釈のメカニズムについてはある程度解明できたものの、名詞修飾型の意味機能の類型化と解釈の条件の解明を今後の課題として進めていく必要がある。

本論文は名詞修飾型構文に焦点を当てて検討を行ったが、今後は名詞修飾型の数量詞が他の数量詞構文（動詞修飾型や添加型）と関わる場合や数量詞が2つ以上共起する場合などにおける意味機能の変化も検討課題である。

また、名詞修飾型数量詞構文がどのような条件下で使用され、どのような場合に使用が制限されるのかといった意味解釈のメカニズムを基盤とした使用条件の解明も必要である。

以上の3点は今後の課題である。